越智郁乃著
『動く墓──沖縄の都市移住者と祖先祭祀』

森話社、2018年、定価 4,200円＋税、240頁

福田真郷 *

本書は、沖縄県内の周縁部から本島都市部などへの墓の移動に注目することを通じて、こんにちの沖縄の葬送、祖先祭祀の日常実践を描いた民族誌である。伊波普猷以来の沖縄学、柳田國男らの民俗学、また、現在の沖縄県民の実生活においても、祖先祭祀は中心的な地位を占めている。廃藩置県、沖縄戦、米国占領、本土復帰といった目まぐるしい社会変動を受けて、沖縄の墓制も大きな変化をたどった。その最前線を、本書は墓の移動から読み解く。著者は、従来の沖縄研究が県内の地域間の文化的差異に慎重になるあまりに、文化圏間の移動についての視座を欠いていたことを指摘する。与那国や石垣、宮古、本島、本土と、異なる文化圏間の墓の移動はまさにコンタクト・ゾーンでもある。こうした混交的な状況下で再認識される祖先観や故郷観は、いかなるものか。

本書評は、まず章立てを示し、続いて各章の概要を提示し、最後に書評者による疑問点を述べる。章ごとにさまざまな角度から墓そのもの、また墓の移動が祀る人々にもたらす影響について考察がなされる。

本書は以下のような構成になっている。

はじめに
序　章　　生と墓
第 1 章　　沖縄社会と祖先祭祀
第 2 章　　世替わりと墓
第 3 章　　墓を造るモノの変化
第 4 章　　墓と葛藤
第 5 章　　骨の処遇
第 6 章　　新しい墓と祖先
終　章　　動き続ける墓

「はじめに」では、著者がフィールドにおいて墓の移動や女性による継承という問題に

*FUKUDA Masato　京都大学大学院人間・環境学研究科　fukuda.masato.58x@st.kyoto-u.ac.jp

直面した経緯が語られる。また、著者も自分のこととしてそうした問題を抱えていることを告白する。

続く序章は、問題意識、目的を明らかにする。沖縄の島嶼部の人々は、さまざまな要因で都市部への移動を運命づけられてきた。しかし、八重山の人々は、移住という語を用いず、そうした移動を「旅」と表現するという。旅と言うからには、また戻ってくるということが意図されているのだ。それにもかかわらず、70 年代ころには墓を都市部に移すことを選択する人が現れてきた。近年でも那覇などの都市部では、移住者の墓が増え続けている。しかしながら、この新しい動きに注目する研究は今まで存在しなかった。故郷や祖先との紐帯はいかに変容したのか、また、移動は移住者の生き方にどう影響するのか。こうした問いが本書の中心となる。まずロベール・エルツ、ファン・ヘネップなど、文化人類学における死の研究史を振り返り、死に関する文化人類学的研究においては墓をめぐる「生者の世界」は焦点化されにくいことを指摘した。

地域研究としての沖縄研究は長年の蓄積があり、墓制研究や祖先祭祀については豊富な先行研究がある。しかし、これら従来の研究においては、移動しない人々の活動にこそ焦点が当てられ、移動はこれらの先行研究から抜け落ちているとし、著者は、混交的な新しい状況からあえて目を背けてきた沖縄研究の政治性を批判する。また、墓の移動は文化圏間のコンタクト・ゾーンであり、故郷と移住先都市との関係性の中にある移住者の生のリアリティを浮かび上がらせる。ここに著者は新しい沖縄研究の可能性を見る。

第 1 章では、先行研究と調査の概要が述べられる。沖縄の死者儀礼、祖先祭祀研究といえば、トートーメ（位牌）の問題や門中、ユタなどが代表的である。現代でも、沖縄では祖先祭祀が生活に大きな位置を占めている一方で、商業化による第三者の介入、それに伴う儀礼の簡略化、県内出版社による知識のマニュアル化などが目立つ変化として立ち現れた。著者はこうした画一化、簡略化を単に都市化、本土化が進んだ結果と悲観するのではなく、選択肢の増加によって逆に活況を呈しているのだと評価する。

第 2 章では、近代以降の沖縄社会の変遷、人口移動などを通じ変化してきた墓制を概観する。置県後の社会変動に伴う都市の成立、ハワイ、ブラジル、台湾など海外への出稼ぎ、そして沖縄戦後の大量の引き揚げ、戦後の都市への人口移動および出稼ぎ。近代沖縄社会では、大規模な移動が頻発している。著者は、こうした社会変動が墓制に与えた影響については、特に戦後の米軍占領以降について先行研究では精査されていないとする。明治期には行政の主導による墓地の管理がなされるようになり、また墓地の自由な造営が一般民衆にも許され、旧士族の祭祀方法が広まるなどの変化があり、近代の沖縄の墓制の特徴が形成される。戦後には米軍基地建設や軍用地料増大に伴う新墓地の造営が盛んに行われた一方で、土地不足や制度上の矛盾による造墓の規制問題などが表面化する。また高度経済成長期以降の業者の増加、大規模な墓地開発、80 年代以降の宗教法人などによる民営墓地の増加なども注目される。こうした中で、墓をアクセスのよいバイパス付近に造るなど、祭祀者のニーズを反映した造墓が増えた点を強調する。

続く第 3 章は、墓に使われた素材（モノ）の変化に注目する。死後の家としての墓は、常によりよい素材を使うことが好ましいと考えられたため、自然石で造られていたもの

が、やがてコンクリート造りの墓になり、本土の影響下で花崗岩の墓が造られるようになったという。花崗岩への変化の際には、文字の彫りやすさなどもあり、家や個人の名前が彫られるようになる。また、故郷のツゲの木の移植など、故郷を想起する墓地空間が形成された事例、同郷出身者と造った共同墓地の事例から、従来のような死後の家としての性質に加え、記憶媒体としての役割をも帯びるようになったことを指摘する。

第 4 章は、墓の移動に際しての葛藤に迫る。ここで取り上げられた複数の事例では、親が元気なうちに移住先に墓を移したい反面、墓の移動で故郷とのつながりを失ってしまうのではないかという葛藤が描かれた。墓は、同じく祖先祭祀のために移動される仏壇とは異なり、土地そのものとの一体感が強く、また、故郷そのものとしての意味合いをも持つ。このため、墓の移動は移住者の生に大きく影響するのである。墓の移動を選択することは、こうした故郷への個人的な想いを、祖先祭祀の安全な継続には代えられないものとして却下することでもある。また、ここでは娘の位牌の相続を、「血」を理由に正当化する親の事例があった。著者はこれを、継がせたいという情動だけではなく、構築された「関係性」が、継承できると確信させることにつながったのだとする。

第 5 章は、墓そのものではなく、そこに祀られる骨に注目し、移動に際しての処遇、またそれを祀る人々の関係性についての記述がなされる。遺骨は、墓の移動時に輸送上の都合から遺骨を「集合化」する必要性が生じる場合が多い。しかし、もともと洗骨が一般的であった地方では、火葬が普及して以降の遺骨との見た目の区別が明確である。墓の移動の場面では、特定の個人として「個別化」される骨と、ひとまとめに「祖先」として「集合化」させる骨との選択が発生し、祖先観が再確認される場となることから、祖先祭祀の継続にも大きな影響を与える。事例では、故人との個別の親密性が個別性を保たれる個人とそれ以前の没個性的、集合化された祖先とを分かつとした。

第 6 章ではまず、洗骨を伴う場合、伴わない場合それぞれの墓の移動の詳細な事例が紹介される。墓の移動の際の儀礼やそれにかかわる人々に注目し、祖先観が再構築される過程を明らかにする。新しい墓に移入される遺骨、そして墓に彫られた家の名前、被葬者の名前などの情報により、墓は祖先との時間的なつながりを記念するものとしての性格を帯びる。また、4 章で触れられたように、移動の際の葛藤の元となる故郷とのつながりは、墓地に故郷のツゲの木を植える、八重山式の墓にする、祖先祭祀の折に触れて故郷や故人の語りをする、といったことにより再び表出し、いったんは退けられた故郷が前景化する。一方で、墓の副葬品の食器、甕、香炉など、骨以外のものは全く移入されない。これは古い墓の死穢を新しい墓に運ぶことを避けるためだとされる。また、正しく祀らなければ不幸が起こる、という祖先祭祀にまつわる災因論は、墓を移動してきちんと祀ることをもって対処できるものだと考えられており、災いをもたらす祖先像は否定されるとした。

終章では、これまでの議論を総括しつつ、墓を移動すること、造ること、祖先を祀ることの意味を改めて検討する。墓の「メモリアリズム（追慕、追憶主義）」が、移動を経て故人や故郷への過去を集団想起する「コメモレーション（追慕・記念）」に変化することを指摘しつつも、コメモレーションが世代を経て記憶の伝承ができない場合、その有効性を失う危険性があることも示す。移動の際に遺骨以外をすべて捨ててしまうために、新し

い墓は、故郷や家といった集団の記憶を想起させる場として構築される。しかし、一方では選択的な故人へのメモリアリズムが祭祀の場でも没個性的な祖先に昇華されることなく保持され、祭祀への動機づけ、墓の同一性に重要な役割を果たす。こうした状況に、中国と日本の双方の影響下にある沖縄の祭祀の独自性が見られるとした。また、墓の移動におけるそうした創造性が、祖先観自体に影響を与えていると結論付ける。つまり、墓と人とは相互に影響しあう関係性の中にあり、墓は永遠に「完成」することはなく、動的なものであり続ける。

以上が各章の概要である。都市への人口集中が続く沖縄県の現状と、そこから生じる墓の祭祀・継承は、沖縄社会を悩ませている大きな問題である。都市への人口移動の盛んな中にありながらも、門中や家の枠組みを重んじ、祖先祭祀や位牌の継承を滞りなく安全に続けようとするならば、墓の移動という選択をすることになる。祖先祭祀は祖先への孝行としてだけではなく、終章などでも触れられるように、災因論的な語りとしても日常に登場する。こうしたアクチュアルな問題に文化人類学が応えることの意義は大きく、本書は非常に価値のある民族誌と言える。また、沖縄戦後の社会変動が生み出した混交的な状況に注目するという新しい研究の方向性を提示した点は大きい。

ここで、書評者による批判、疑問点を以下 3 点挙げることとする。

一つ目に、4 章および 6 章で紹介された、那覇から福岡への墓の移動の事例（玉城家）について述べる。この事例は、その他の事例とは大きく異なり、女性の相続であり、沖縄県外への移動であった。また、移設の際には主に真言宗の僧侶を頼りにしている点も特徴的である。この移動後の墓の様子については詳しく触れられていないが、本土への移動の場合、沖縄的な墓の前での祭祀や、他の事例にあったような故郷を想起させるような仕掛け（八重山式の墓地、故郷のツゲの植樹など）をすることは非常に難しいと考えられる。また、仏教を頼ったのは、距離の問題や、女性の継承であるという点から沖縄で行われるような祖先祭祀が難しいという判断があったのではないだろうか。こうした点から、本書で述べられている墓の移動の議論の有効性は、あくまで沖縄県内の移動に限定されてしまう部分が大きいと言えるだろう。県外移住者にとって、墓の移動は、県内都市部への移動以上の心理的なハードルの高さがあると思われる。こうした状況において、「旅」の途上にある県外移住者が、どのような解決を図るのかは非常に興味深い。

またこの事例は、沖縄的な祖先祭祀が、本土で一般的に行われる仏教的な祖先祭祀に変換される過程であるとも言えるだろう。こうした「本土化」と言える状況下では、どれほど故郷とのつながり、また墓の同一性が保たれうるだろうか。また、沖縄の伝統的な祭祀空間での男尊女卑性は、こんにちでもしばしば問題化するため、こうした問題への対応は重要な視点であるが、この事例の場合は、沖縄的な祭祀体系からの離脱をもって解決しているように見える。娘が継ぐことを親が了承した背景には、上記のような事情も少なからず影響しているのではないだろうか。

二点目に、ブルーノ・ラトゥールらのアクター・ネットワーク・セオリーや、アルフレッド・ジェルのエージェンシーの議論など、近年のモノ研究で参照される文化人類学的な先行研究も、本書中で取り上げる価値があったのではないかという点を指摘したい。序

章では、死に関する人類学の先行研究が検討され、また、終章ではメモリアリズムなどの議論が引かれている。しかし、墓のアクターとしての性質やエージェンシーは無視できない。本書中でも、墓と人の相互関係性や墓のモノとしての性質の問題は取り上げられるが、中心的な議論はあくまで祖先祭祀そのものに置かれていた。祖先祭祀の継続は、墓の継承者、遺骨、その親族、葬祭業者、ユタ、その他の多くのアクターが存在し複雑なネットワークの中に行われている。本書のタイトルで、墓が「動かされる」のではなく、「動く」と表現されているのも、そうした複雑に入り組んだ相互関係が念頭にあるがゆえであろう。より動的な墓の様相を活写するには、アクター・ネットワーク・セオリーは検討する価値があったように思う。また、遺骨は故人の人格の一部でもあり、墓は祀る人により人格を付与されるものである。故人の遺志の忖度も含めて、墓と人の関係性はエージェンシーの議論をただ敷衍するに留まらない、有益な事例を提示できたであろうと思われる。

三点目は、墓の移動以外にも、さまざまな祖先祭祀形態の導入が考えられるのではないかという点を指摘したい。無論、本書にあるように、金銭面や故郷とのつながりを理由に墓の移動を断念する人もいるだろう。しかし、著者も述べるように、祖先祭祀の選択肢は多様化している。移住者の選択肢も、墓を動かすか動かさないか、だけではないはずだ。まず、納骨堂を選択する場合はどうだろうか。近年では、永代供養をする納骨堂が各地に増えており、沖縄県もその例外ではない。島嶼部も含め、県内各所にそうした納骨堂が存在している。遺骨をお堂に納めておけば、祭祀や管理はすべて請け負ってもらえる。その上、新しい墓の建造よりもはるかに安く済む。こうしたサービスの利用者がさらに増えてくれば、いずれは墓の移動自体が見られなくなるかもしれない。また、近年では海洋散骨の業者も増えており、書評者自身もフィールドワークの際に沖縄県の散骨業経営者と知り合った。こうした葬法では、墓どころか祀る骨さえ不要になるのである。このような選択をする人々の祖先観は、墓を移動させる人々の祖先観以上に先鋭化して、あるいは伝統的な沖縄の祭祀からの逸脱をしているように思われるが、墓を移動させた人々のように、人の移動とともに墓を動かして祖先祭祀を従来通りに維持することだけが選択肢ではなくなっていることも事実である。本書の関心が墓の移動にあり、書評者の以上のような指摘は射程の外にあることは承知しているが、こうした新しい選択肢も今後の沖縄における祖先観に少なからず影響することになるだろうと考える。

以上が書評者の疑問点である。しかしながら、本書の民族誌的価値は大きく、沖縄研究の今後の方向性を示した書籍として大きな価値があるということを再度指摘しておきたい。